

目指せ！筑波山地域ジオパーク！

ジオパーク (Geo Park) の「ジオ (Geo)」は、「大地」や「地球」という意味。筑波山地域6市が、連携してジオパークの認定を目指しています。



2億年をさかのぼる石岡市の大地の物語を訪ねる歩き書きのシリーズ。全8回の掲載です。

いしおかの大地を歩く

第5回

岩も溶ける地底の世界 (峰寺山)

八郷盆地の西側の吉生地区に古刹西光院のある峰寺山がある。上根入口バス停から林道をたどって峰寺山を目指す。里の風景を愛でてすぐに登りの林道に辿りつく。切り割りに白っぽい岩がある①。比較的新鮮で、数ミリ大の白や黒色の鉱物粒からできていることが分かる。この岩石は地下でゆっくりマグマが固まった花こう岩の一種で、石英、長石、黒雲母からできている。よく見る稲田の花こう岩(稲田石)などに比べると黒味が強いが、これは黒雲母が多いためである。また小指の半分以上の長石の結晶が目立つ。この岩は筑波花こう岩と呼ばれ、筑波山周辺から八郷盆地南部のあちこちに顔を出す。

林道を登ると二つ目の曲がり古い石碑が4基立っている②。花こう岩でできた一つ以外は暗灰色の変成岩だが、この山の石でない。その一つに白い脈が細かく折り畳まれているものが見える。岩脈が貫いた後に変形したものである。朝日峠、小田山あたりの岩石に似ている。石碑が林道の方を背にしているのは、正面側にある溝がかつての参道だったからである。

③の所に大きな丸い岩が出ている。丸い岩は花こう岩で、よく調べてみると、まわりのぼろぼろの砂のような部分も風化した花こう岩そのものである。同じ岩盤であったものが岩の割れ目などからしみ込んだ水などで分解され、まだ硬さを保っている部分が玉のように残っている。花こう岩の風化物は「マサ」と呼ばれ、水を多量に含むと崩れやすくなるので、マサが厚い場所では注意が必要だ。先年の広島や長野の土砂災害報道でマサという言葉に聞き覚えがあるのではないだろうか。

④辺りになると黒っぽい岩石が見える。これは、ジュラ紀の泥や砂の地層が熱や圧力を受けて結晶質となった変成岩である。雲母類がチカチカ光る。歩いていくと花こう岩が出てきたり変成岩になったりするのでその境界は複雑のようだ。⑤の所には変成岩が出ている。花こう岩の部分もあるが境目がはっきりしない。

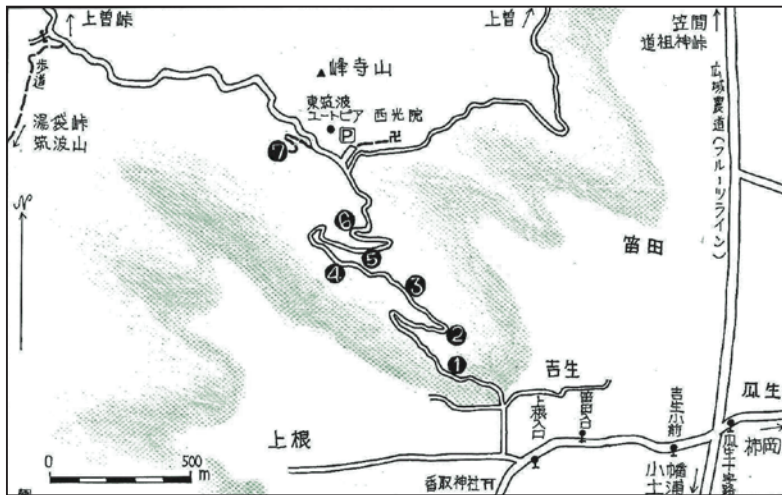
これは変成岩の融解が始まっているからである。肉を焼けば脂身が溶け出すように、変成岩も温度が上がれば石英と長石からなる部分が溶け出す。マグマが生まれる瞬間だ。黒雲母は溶けておらず、変成岩側を縁取るように残される。

⑥の辺りで、尾根上に堆積している赤土(関東ローム層)が見られる。その中に小粒の黄色い軽石層が挟まるが、これは4万年前に群馬県の赤城火山の噴火により放出されたもの。園芸土の鹿沼土と同じものだ。

県指定天然記念物球状花こう岩⑦は道から階段を下ったところにある。球体を作っているのは葦青石という青色の鉱物で、黒雲母の多い部分が芯を作る。花こう岩マグマにより変成岩が融解

し、条件が整って葦青石の液体が生じ球体を作ったものと推定されている。このような岩石は他に例がなく珍しい。大地の奥底での出来事が峰寺山には記録されている。

文 環境省委嘱自然公園指導員 矢野徳也



▲峰寺山付近案内図